

# 初期アメリカ文学の思想的背景

難 波 三 郎

昭和52年9月16日受理

## I. ピューリタニズム

ニュー・イングランドの植民地形成の歴史は、内容を異にする2つのピューリタン集団によって始められた。第1の集団は1620年の冬、メイフラワー号でPlymouthに上陸したPilgrim Fathers (102名)であり、第2の集団は1630年、アラベラ号他3隻の船でヤーマス港を出航し、マサチューセッツ湾に入り、Bostonに植民地を建設したウィンスロップ(John Winthrop, 1588~1646)を指導者とするピューリタンたちである。

第1の集団、ピルグリムズの歴史は、ロンドンから約150マイル北にあるスクルービ(Scrooby)という村から始まる。ブルースター(William Brewster, c. 1560~1644)が、1588年に中央の官途を辞し、故郷のスクルービに引退して、父の職 King's Master of the Post (村の郵便局長)を受けつぎ、やがて、近郊の分離派(separatist)の人々に、集まって来て、集会すべきことを勧めた。こうして、当時は非合法であった「信者の集会」(congregation)が、スクルービにも形成され、かのブラッドフォード(William Bradford, 1590~1657)も、少年の日にその「集会」を聴聞して成長していった。その Scrooby congregation は、1606年には「完全に組織された」チャーチになっていたといわれ、同年、卓越したもう一人の指導者、ロビンソン(John Robinson, 1575~1625)をむかえ、ますます堅固なものとなっていった。しかし、まもなくジェームズ一世のピューリタン弾圧が強化され、1607年にはスクルービ・チャーチの人々もそれぞれに迫害される。ある者は牢に入れられ、他の者は昼も夜も看視されて逃れることもできず、残り大部分の人々は、家をすてて逃亡するしかなかった。

こうして彼らは全員一致の同意のもとに、オランダへ渡る。アムステルダムに一年ほど居た後、ライデンに落ち着き、その地で集会所をつくり、ロビンソンとブルースターの指導のもとに、11年もしくは12年のあいだ暮す。その間「ライデン・チャーチ」の同胞は、自然増加やイングランドの処々方々からの後来者で、約百人から三百人にふえていった。しかし、やがて経済的貧困の度がひどくなり、生活の苦しさのため、離れていく者も出て来る。そうしたなかで最も忍び難かったのは、彼等の子供たちの多くが、生活苦加えて、その国の青少年の放縦や、数々の誘惑やのために、両親から離れ去ってゆくことであった。この様な事情の他に、彼等は、キリストの王国の福音を世界の遠い地方にまでひろめるための人々の踏み石ほどのものになってでも、尽したいという内心の熱望をいだいていた。こうした内部的理由のほかに、新大陸アメリカへの移住決定へと導いた外部的状况として、

オランダがカトリック教国スペインの侵入の危険にさらされ始めた、ということがあげられる。そうした内的根拠に外的条件が加わって、〈アメリカ移住決定〉ということになったのだ。

準備が終わると、移住する人々（ライデン・チャーチの同胞のうち数十名）は、同胞に付き添われて住み慣れた町を出て、何マイルも離れたデルフェス・ハーフェンの港に行き、その港で、彼らの牧師ロビンソンをはじめ、それまで幾多の艱難を共にしてきた多くの同胞たちと、涙の別れをした。時に1620年7月、風のある日であった。多くの者にとって、生涯の離別であったのだ。……「彼らは、自分たちが巡礼 (pilgrimes) にすぎないことを自覚していたのであり、この世のものを重んぜず、却って目をあげ、心に最もしたわしい国である天を仰ぎ見、心を静めた」……こうして港を離れ、順風におくられ、ほどなく彼らはイギリスのサザンプトン港に着いた。

8月5日、そこから120名が2隻の船に乗って、アメリカへ向う。その120名のうち半数は、この移民計画に出資したロンドンの商人たちに雇われた者たちで、宗教上は国教会に属していて、「外部の人たち」(strangers)とピルグリムズによって呼ばれた。出航後まもなく、小さい方の船が水もれし始め、仕方なくダートマスに寄港し、修理し、再び海に出る。が、しばらく進むと、また小さい方の船がひどく浸水しだだし、又もや両船は英国の港に引返す。港で、結局、その小さい老朽船は不適當と判断され、その船と同行者の一部とをあとに残して、102名（内、ライデンの同胞35人、スクルービ以来の同胞は12人）がもう一隻（180トンの貨物船メイフラワー号）につめこまれて出港したのは、9月6日のことであった。以後2カ月にもおよぶ苦しい歳月をかけて大西洋を乗り切って、ようやく11月11日、コッド岬とよばれる陸地に着く。が、そこは元来の目的地ヴァージニアから相当北にそれた所で、その荒涼とした光景は彼らを失望させる。なかには契約違反を訴える者もあり、そうしたことでピルグリムズと「外部の人たち」との間に対立が起きた時、ブルースターによって起草されたメイフラワー誓約がもち出された。<sup>1)</sup>

神の名において、アーメン。われら下記の者たち…は……神の栄光のため、キリスト教の信仰の増進のため、及びわが国王と祖国の名誉のために、ヴァージニア北部地方における最初の植民地を創設せんとして航海を企てたのであり、神と各自相互の前に於て、ここに本証書により、厳肅に相互に誓約し、互に契約し結合して政治団体をつくり、以ってわれらの共同の秩序と安全を保ち進め、且つ上掲の目的の遂行を図ろうとする。そしてこれによって今後、植民地一般の幸福のために、最も適当だと認められるところにより、随時、正義公平な法律、命令等を発し、憲法を制定し、また公職を組織すべく、われらはすべてこれらに対し、当然の服従をすべきことを誓約するものである。……<sup>2)</sup>

このように、その誓約 (*Mayflower Compact*) の中には述べられていて、1620年11月11日の日付があり、Mr. John Carver, Mr. William Bradford, Mr. William Brewster をはじめ「外部の人たち」を含めて41名の署名があり、41名中11名には Mr. の敬称が付けられ、その社会的地位が示されているという。

誓約書作成の後、彼らはジョン・カーヴァーを最初の知事 (Governour) に選んだ。11月15日、一行のうち十数名の者が、植民地建設に適当な地を探しに、第1回の探険に行く。その後2回の探険が行われて、ようやくプリマスの地に決定し、上陸するのは12月20日のことである。このように手間どって、やっと上陸したものの、2～3カ月の間に、寒さと欠乏とのために、彼らの半数もの人々が死んでいった。壊血病、その他の病気にかかっていたのだ。ひどい時には、1日のうちに2人も3人も死んでいった。そして辛うじて、50人が生き残れたにすぎなかったのである。<sup>3)</sup>

新大陸アメリカは、彼らにとって、当初あまりにも冷たい世界であった。ブラッドフォードは、その印象を次のように回想している。

今は迎えてくれる友もなく、風雨にやせ衰えたからだを受け入れくれる宿屋もなく、救いを求めに赴くべき家もなく、ましてや町など皆無であった。……目に入るものといえば、野性の動物・蛮人の住む荒涼とした恐ろしい荒野だけであり……いずれのかたに目を転じても (天を仰ぎ見るときは別として)、目に映るものの姿は、心を慰めてもくれなければ、満足を与えてもくれなかった。……森と茂みにおおわれた土地全体がなんとも荒涼としていた。背後には、越えてきた大洋があり、この大洋は今では、あらゆる文明国から自分たちを隔てる障害であり障壁であった。<sup>4)</sup>

その様な世界で、半数もの人々が死んでいったが、彼らはいかなる時にも絶望せず、闘いつづけ、荒野のなかに、文化と学問の理念とが結合した宗教を持ち込み、森に対していかなる譲歩もしなかったのである<sup>5)</sup>。

こうして、前途多難なプリマス植民地の建設に彼らは必死で立向かう。こうした折、1621年5月、初代知事カーヴァーが畑で働いていたとき卒倒して死亡……。彼を継いで、ブラッドフォードが知事に選ばられ、その献身的な指導によって、建設は徐々に進んでいった。しかし、マサチューセッツ湾植民地に比べ、元来いろんな面で不利 (一行は非常に少人数で、しかもライデンの同胞ピルグリムズはその内の半数にも満たなかったし、聖職者もいなかった。そのうえ、国王の特許状を持たず、ロンドン商人への多額の負債にも苦しめられた...) であったので、プリマス植民地はやがて、ピルグリムズがライデンで経験したような信仰の衰えをみせはじめる。そうした変容を、ブラッドフォードは晩年、次のように述べている。

ああ神聖なる絆よ、破られないで保たれている間は、……しかしこの絆を守ろうとする心が一度くずれてくると、破滅が近づいてくるものである。……初期においては、美しい交わりの祝福された果実をみて、安らかな気持でそれを享受することができて幸福であった。しかし今やその衰微と少なからざる欠乏を見、それを感じ、悲痛な気持でそれを嘆き悲しむのは晩年の私の不幸の一部である。そしてここに、他の人に対する警告と戒めのため、また私自身の恥のためにも、これを記録しておこう。<sup>6)</sup>

この Bradford は 1657 年に亡くなるが、ピルグリムズの指導者の一人として、また苦難にみちたプリマス植民地建設の指導者として、さらには文学的にも優れた『歴史』(*Of Plymouth Plantation*)の著者として、彼が捧げた貢献は極めて大きく、長老ブルースター、牧師ロビンソン、初代知事カーヴァーと共に、その名は忘れられることはないであろう。なお、ブラッドフォードのその記録の文体は、素朴で荘重、しかも柔軟である。

彼の死後、Plymouth 植民地は知的にも政治的にも有能な人材を欠き、また初期の民主的気風もうすれてゆき、ついに 1691 年、Massachusetts Bay 植民地に吸収されていった。しかし、ピルグリムズの世界——摂理 (Providence) を確信し神の道を求めて旅する巡礼の精神は、Roger Williams (1603~1683) をして Rhode Island の植民地創設に向かわしめ、又、信心深き人々をして世俗化した東部から西部へと向かわしめていったのである。さらに、その精神はアメリカ文学の底に流れつづけてきているといえよう。

ジョン・ウインスロップを指導者とする第 2 のピューリタン集団は、1630 年にマサチューセッツ湾植民地の建設に着手した。彼らは、ピルグリムズとは違って、新しい社会をつくろうという野望と、そのための具体的な計画とをもって移住してきたのであり、多数の人々 (1630 年だけでも千人以上) が力を合せて建設にたずさわったのである。ウインスロップをはじめとする彼らの指導者たちは、ジェントリ出身で大学教育を受けた人々であり、さらに、ジョン・コトン (John Cotton, 1584~1652) をはじめ幾人もの聖職者たちも参加していた。1640 年までに約 2 万名もの人々が移住してきて、発展の基礎がつけられる。

ところで、ウインスロップをはじめとする最初の人々の移住の動機は、チャールズ即位後のピューリタン弾圧、毛織物業不振による経済的困難、新植民地の建設が優れた指導者を求めているという認識等々、多くのものがあつた。ウインスロップは、こうした多くの原因を自らあげながら、しかも移住の目的を、新大陸に神の意志にそった社会をつくることにあると自覚して、神との契約による共同社会の建設をめざしたのである。彼は上陸に先立って、アラベラ号上での「キリスト教的慈愛の模範」(*A Model of Christian Charity*) と題する説教の中で、こうした考えを示した：——

かくして神とわれわれとの間に大きな目的があり、この仕事のためにわれわれは神

との契約にあずかるのである。われわれは任務をうけている。主はわれわれ自身の契約書をつくることをお許しになった。われわれはその目的のために企てに乗り出すことを誓約した。われわれはここにおいて、神に好意と恩恵とを願う。

さてもし神が喜んでわれわれに耳を傾け、希望している場所へ平和に送ってくださるならば、神はこの契約を嘉し、われわれの任務を認め、契約に書かれた条項を厳格に履行することを期待しておられるのである。もしわれわれが……契約条項を守ることをおろそかにし……物質的目的に営々とし、われわれ自身および子孫のためにのみ大なることを求めるようなことがあるならば、偽りの誓いをたてた者どもに復讐し、この契約を破ったことの価を知らしめ給うであろう。<sup>7)</sup>

この説教の以前、1629年8月に実は、ウィンスロップ渡航団の指導的人々12名全員によってなされた誓約の中に、「神の栄光と教会の福祉とのために」(‘for God’s glory and the church’s good’) という移住目的が、明記されていたのであった。

彼らは「信仰の清純」(‘The ordinances of God in their purity’) を保持するために、英本国の専制政治に反対して、新大陸へ脱出してきたのであったが、大衆に対しては commons 又は meanest sort としてとらえ、大衆が植民地統治の中枢に参加するようになることを警戒して、少数の賢人による、法治的(‘regular’ 又は ‘regulated’) な「混合貴族政」(‘a mixed Aristocratie’) の考えを堅持した。こうした考えの根拠を神の言葉に求めようとして、デモクラシーを排して神政政治(theocracy)を主張するジョン・コトンに求めた、といわれる。<sup>8)</sup>

マサチューセッツ湾植民地の性格については、学者によって異なる。例えば、『ニュー・イングランドの創設』<sup>9)</sup>の著者、J. T. アダムズは、先ず英国におけるピューリタニズムを台頭する中産階級のイデオロギーとみなし、ピューリタンの大移住の理由に関して、宗教的なものがその主たる理由とはとうてい考えられないとし、下層ジェントリー以下の階層の人々が多数移住したのは多分経済的な動機によるものであらうと言ひ、多くのピューリタンの移住は「よりよい条件を求めたという単純な理由による」と結論づける。そして、その植民地社会を、神権政治を支配した少数のエリート的ピューリタンと彼らに反感を抱く多数の大衆という構成でとらえ、抑圧と服従によって特徴づけられる社会であった、と彼はみる。また、『アメリカ思想の潮流』<sup>10)</sup>を著わし、アメリカ思想の主流を自由主義の発展とみたパリントンは、ピルグリムズのプリマス植民地の相場をひき上げ、マサチューセッツをひき下げる。それにマサチューセッツの教会指導者ジョン・コトンを偏狭な特権階級の利害の擁護者にすぎなかったと見下し、マサチューセッツから追放されロード・アイランド植民地を創設したロジャー・ウィリアムズを見上げるのである。

こうしたアダムズとパリントンに対し、『マサチューセッツ湾植民地の建設者たち』<sup>11)</sup>を著わしたモリソンは、自己の価値観に従ってピューリタンを批判(外在的批判といえよう)

するのではなく、ピューリタンをそれ自身の言葉によって理解し批評（内在的批評とでもいえようか）すべきであると主張し、新しい資料に基づいて、多数のピューリタンの移住の根本的動機は宗教的なものであったと判断し、彼らがいかに自己の信条に献身した誠実な人間たちであったかを示すと同時に、少数のピューリタン指導者と彼らに反感を抱く多数の民衆という想定を否定する。さらに彼は「その植民地社会の教会員は初期においては多数で、第二世代・第三世代においても大半の住民はピューリタニズムに好意的であった」と述べるのである。

ここで筆者は次のように考える。—— J. T. アダムズもパリントンも、それぞれにマサチューセッツ植民地社会のある面を描き出してくれているのであり、モリソンとてもその社会の全面を示し得てはいまい。ややもするとモリソンはピューリタン社会を美化しがちである。その証拠には、マサチューセッツ植民地社会も、それが内包していた諸矛盾が時と共に表面化してゆき、やがて衰退していったのである。考えてみれば、いかなる社会も人間がつくった社会である以上、必然的に矛盾を内包し、社会の発展と共にその矛盾が表面化して、やがてその社会は衰微に向うのであり、それに代って新しい社会が生まれてくるが、その社会も遅かれ早かれ、同じような過程をたどり、そういうくり返しをつづけながらも、人類は少しづつよりよい社会をつくってきているのだと思いたいが、はたして本当はどうなのであろう。

ところで、ピューリタニズムに関しては、その著名な研究家ペリー・ミラーが次のように語っている。

ピューリタニズムは、殊に最初の移住者がニュー・イングランドにもたらした物の見方、価値体系としてみることができるであろう。彼らは英国のプロテスタントであり、その根本的確信は、全ヨーロッパのプロテスタント、少くともカルヴィン主義的プロテスタントと同様のものである。しかし、ニュー・イングランド植民地特有の孤立——人々の等質性、(耕作に適した)土地の稀少さ、(厳しい)気候、経済的苦闘——は、このプロテスタントをじきに独特な人々にしたのだ。彼らの社会はしっかり組織され、殊に彼らは自己の立場をはっきりと表現する人々であった。このため、ニュー・イングランドの人々は、ピューリタニズムを——善かれ悪しかれ——アメリカ人の生活と思想とにおいて絶えることのない要因の一つとして、確立したのである。<sup>12)</sup>

他方、モリソンは、ピューリタニズムの特性を、一つの理念、高い原理に献身する生き方であるとみるのであり、ピューリタンを、私利私欲にとらわれなくて、勇気をもって高い理想をめざして生きた人々であった、と考えるのである。

さらに、分離派に関して、ペリー・ミラーは次のように述べている。

分離派の教義は次のように要約される。選ばれた者が墮落した者と交流している教会は、真の教会ではありえない。英国の教会では、選ばれた者がそうした交わりをしている。故に、英国の教会はまちがった教会である、と。...<sup>13)</sup>

また、イェール大学教授、エドモンド・S・モーガンは、「分離派は、他のピューリタンが考えにおいて、あるいは...理論において保持していた諸原則を、現実に実行したのである」<sup>14)</sup>と言っている。

こうした観点からすれば、同じく会衆主義ではあるが、マサチューセッツ湾植民地を建設した非分離派のピューリタンよりも、プリマス植民地建設に苦闘したピルグリムズ（分離派ピューリタン）、及び、分離主義を徹底的におし進め政教分離の必然性を説き直接民主政のロード・アイランド（Rhode Island）を創設したロジャー・ウィリアムズの方が、ピューリタニズムの本流であるというべきか。

一言付け加えておくと、思想史的な流れから大胆に言えば、「非分離派のマサチューセッツ湾植民地社会は後のマディソニアン・デモクラシーへと流れ、これに対し、ピルグリムズの分離主義をさらに徹底させたロジャー・ウィリアムズのロード・アイランド植民地社会は、後年ジャクソニアン・デモクラシーへと流れてゆくことになるのだ」といえるのかもしれない。この点の考察は他日してみたい。

ここでは次に、アメリカにおけるデモクラシーの形成を、独立革命とジェファソニアン・デモクラシーとに重点を置いて、論述することにしよう。

## II. デモクラシーの形成

1775年に勃発した「独立戦争」は、アメリカでは「アメリカ革命」（American Revolution）とよばれているように、アメリカにおける「市民革命」としての意味を有し、デモクラシー形成への第1段階であった。

この独立戦争において、苦戦をつづけたアメリカ軍を最終的に勝利に導いた中心人物は、なんといっても、ジョージ・ワシントン（George Washington, 1732~1799）であろう。そこで、ワシントンから述べてみることにする。

民主主義を建国の理想とするアメリカ合衆国の形成期における三つの重大な事柄（独立戦争、憲法議会及び最初の国家行政）において、決定的要因となったのは、ワシントンの人となりそのものであったといわれる。——先ず、独立戦争において、不ぞろいの独立革命軍を最悪の時期につなぎとめたのは、彼の鉄のような意志の力以外の何物でもなかった。次に、1787年の憲法議会を一つにまとめたのは、議長としての彼の出席そのものであった。第3に、共和国を憲法の下に送り出したのも、彼のパーソナリティによるものであった、という。<sup>15)</sup>

本来ジョージ・ワシントンは、大変内気な崇高さを蔵していた。公衆の面前で話すのは下手で、表現は遅く、思考はとだえがちであった。見知らぬ人と会うと当惑しがちで、友達の間でだけ、暖まり、馴れた。こうした彼が合衆国の形成期において中心的役割を果たすことになったのは、カルヴィンの道徳性と貴族的義務感との複合たる彼の高潔な人格のためであった。<sup>16)</sup> そうした崇高な人格をもっていたからこそ、彼の思想（共和主義・民主主義・自由主義）が現実のアメリカ社会で十二分に生かされたのだ。

そうしたワシントンと性格においても思想においても対照的であったのが、ハミルトンだ。ハミルトン (Alexander Hamilton, 1755~1804) は、鋭い人間で、頭の回転は早やく記憶力も抜群であったが、独創力は乏しかった。人に対しては、無礼で鬪争的であって、冷血漢的な面を多分に有していた。たとえば、一生涯ワシントンの恩をうけていながら、この巨人に対して、侮辱的な、軽侮的な言葉を吐いたという。人を尊敬することができない性格の持ち主であったようだ。それに、大変な野心家で、仕事(特に財務長官であった時)はよくしたが、心の中では、民主主義を軽侮し、且つ恐れてもいた。当然、こうした彼をアメリカの現実はやがてその歴史の主潮から退かせていった。<sup>17)</sup> もし、アメリカがハミルトンに完全に従っていたならば、アメリカは18世紀英国の如き政府か、あるいはいわゆる全体主義国家のような政府をもつことになったかもしれないという。<sup>18)</sup> なお、ハミルトンのようなタイプの間人は、いかなる時代にも、いかなる社会にも、存在するものであろう。この点、注意すべきだ。

ところで、ワシントン内閣において、ハミルトンと底深い対立をしたのが、ジェファソンである。ハミルトンとジェファソンの対立は主として政治的なものであったが、しかしそこには個人的なものもその底にあったのであり、根深いものであった。都会人と田舎者、農民を愛さない者と愛する者との対立でもある。そして特に重要な相異点は、人間観にあった。ハミルトンの中心思想でもあるその人間観は、「貪欲と私利によって常に動かされている墮落した利己的な動物」として人間をみるものであり、大陸会議(1787年)においても「...人間一般について考えて下さい。人間というものは邪悪なものであります」と言い、「人民というもののはめったに正しく、判断したり決定したりしないものであります」と述べたのだ。<sup>19)</sup> ここに、ハミルトンが、民主主義者と永遠に手を切った決定的な思想がひそんでいる。他方、ジェファソンは、人間は先天的な道徳感覚(道徳的本能)と理性をもっており、教育やその他の方法によって、成長してゆくことができ、やがては完成の域に達することが可能である、という信念をもっていたのである。<sup>20)</sup>

元来、Thomas Jefferson (1743~1826) は、ヴァージニア植民地の西部フロンティア、父親が独力で開拓しつくり上げた農場で、生まれ育った。ジェファソンが、フロンティア育ちであったという事実は(もっとも彼の母親は貴族出であったが)、彼の思想とアメリカのデモクラシーに永続的な影響を与えたといわれ、フロンティアは彼に、自恃と常識と、殊に仲間に対する変ることのない尊敬の念とを教えたといわれる。<sup>21)</sup> 実際、今日に到るま



でデモクラシーのシンボルとされているこの偉人ジェファソンを理解するには、どうしてもフロンティアの環境を考慮に入れなければならない。

フロンティアに次いで、ジェファソンの人間形成に深い影響を与えたものは、彼の父と18世紀の啓蒙思想とであった。ジェファソンの父は、独立独行の開拓者で、人々に広く尊敬され、インディアンにさえも尊敬されていたといわれる。この父から彼は人類同胞愛の教訓を学んだようだ。

ジェファソンは、書物に対する熱情を生涯いだきつづけ、当時のアメリカでは最大の蔵書をもつに至るしんからの読書家であり、ほとんどすべての分野の知識を吸収したが、なかでも特に、ジョン・ロックや、イギリスの法律家たち、および18世紀啓蒙哲学の偉大な思想家（ことにモンテスキューとエルヴェシウス）を深く研究したのである。<sup>22)</sup> こうした学者ジェファソンは、弱冠33歳で独立宣言の起草委員会委員長に選ばれ、主たる起草者となって、その宣言書の中に「すべての人は平等につくられ、創造主（神）によって、一定の奪い難い天賦の権利を付与され、その中に生命、自由および幸福の追求が含まれ、（そして）これらの権利を確保するために人々の間に政府が組織され、その正当な権力は被治者の同意に由来するものであり、（そしてさらに）いかなる政治の形態といえども、もしこれらの目的を毀損するものとなった場合には、人民はそれを改廃し、彼らの安全と幸福をもたらすのに最も妥当であると認められる主義を基礎とし又、そう認められる権限の機構をもつ、新たな政府を組織する権利を有する；ということを我々は自明の真理であると信ずるものである」<sup>23)</sup>と書いた。

民主主義に対するジェファソンの信念は、1801年の大統領就任演説のなかに、具体的に次のように表現されている：――

すべての人に対して平等且つ厳正な法の正義を与えるべきこと、宗教的あるいは政治的にいかなる地位にありあるいはいかなる流派にあっても。すべての外国と、平和、通商、友好関係を保ち、いかなる国とも錯綜した同盟を結ばぬこと。国内諸問題の最も有力な政治機関として、また、反共和政治的諸傾向に対する最も確かな防壁として、各州政府の有するすべての権利において各州政府を支持すること。国内の平和維持と外国に対する国家の防衛との最後の頼みの綱として、中央政府を憲法の許す限りにおいて維持すること。人民による選挙の権利を固く擁護すること……多数の決定に絶対的に従うこと。…十分に訓練された民兵をもつこと。…軍部の権限に対して文官の権限を優越させること。勤労者の負担を軽くするために公共の支出を節約すること。国家の債務を正直に支払い、公の信用を神聖に保持すること。農業の振興を主とし、商業の振興はその従とすること。情報を一般に弘布し、世論の審判の前にすべての権力乱用について審問を行わせること。宗教の自由。言論出版の自由。人身保護律の保護の下における身体の自由。公平に選ばれた陪審員による裁判を行うこと。<sup>24)</sup>

こうした民主主義の諸原則を述べただけでなく、この就任演説のなかでジェファソンは、国民の間に調和と愛情をとり戻すことを呼びかけ、専制主義反対を表明し、賢明にしてつましき政府を強調している。<sup>25)</sup> ここで注目すべきことに、そうしたジェファソニアン・デモクラシーの理想を、ジェファソンは大統領に就任するや、着々と実現していったのだ。——大統領の官職をめぐる色々な虚飾をとり除き、儀式も非常に簡素化し、政府官吏の数を減じ、政府費用の節約を計った。また、海軍、陸軍ともに縮小し、連邦判事の増員を中止させ、多くの国内税を撤廃した。その他、政府を強力にするものはことごとく撤廃。一方、信仰の自由が確立されて、各宗派はそれぞれ自由に自派の布教を行うようになり、それぞれに発展し、学校を経営して青年の指導に当るようになってゆく。他方、言論出版の自由が確保されたことにより、新聞・雑誌の発達は著しく、特に新聞については、価格の安い日刊新聞が多数発行され、すべての人が購読できるようになっていった。ジェファソンはまた、1803年フランスのナポレオンより、ルイジアナ地方を1500万ドルで買いとり、合衆国の領土を2倍以上にする。<sup>26)</sup> 西部に拡大されたそのような広大な土地に、交通の発達が要請され、彼の認可を得た財務長官ギャラティン (Gallatin) は、道路、河川、港湾、および運河の建設・改修などによる全国的交通網建設の計画を立てる。<sup>27)</sup>

真の民主主義者であったジェファソンは「共和政治は国民の考えが進歩しなければ維持できない」<sup>28)</sup> という信念をもっていたので、一般的な公立学校制度の樹立のために尽力し、大統領退任後は、彼の理想であった州立大学の設立に努力し、アメリカ最初の州立大学としてのヴァージニア大学を自ら設計して創立し、その初代総長となる。彼はまた、奴隷制度反対のために、若い頃（独立宣言の中に織りこもうとした）から死ぬまで努力するものであり、彼の民主主義は個人の自由をめざしたものであった。<sup>29)</sup>

時にアメリカの独立と民主主義に関して述べる際、どうしても看過することのできない男がいる。それはトマス・ペイン (Thomas Paine, 1737~1809) である。

アメリカ植民地人に対するイギリス本国の重商主義的支配の強化が、英国政府と植民地の民衆との対立を激化させていた1770年代。ついに75年4月、レキシントンとコンコードとにおいて、アメリカ民兵とイギリス軍との間に戦闘が起り、翌月に、第2回大陸会議が招集され、民兵隊を正規軍に組織改編するに必要な措置がとられ、ワシントンが総司令官に任命される。事態がこのように進展してもなお、有力者たちは英国と和解しようとひそかに期待していたといわれる。

こうした状態のさなかにおいて、一人の男が事態の流れの方向を見きわめ、大胆かつ妥協を許さぬ主張——イギリス本国からの分離、すなわち独立した共和国政府の樹立——を貫いた『コモン・センス』(Common Sense) というパンフレットを書いた。「アメリカのよって立つ大義名分は、概ね全人類のよって立つ大義名分と等しい」とその「はしがき」で述べた後、「社会は自然にできたものであるが、政府は人為的なものであり、まして英

国政府は、一見共和制に見えるが、王がいて君主政治がその上に被いかぶさっている政府であるから、そのような英国政府に服従するのはバカげている……」という旨、様々な角度から詳細に論述。さらに、「アメリカの人々は、愚劣な英国政府と縁を切って独立し、自分たち自身の手になる政府を樹立すべきであり、現にそうすることのできる実力もあるのだし、しかも今の機会をのがしては永久に機会はめぐってはこないであろうから、直ちに内外に独立の宣言をするべきである」と具体的な例をあげたりして説いたのである。

この『コモン・センス』に対する人々の反応は、素早く且つ驚くべきものであった。3カ月以内に12万部売れ、その後もどんどん売れて実に50万部に達し、それと共に独立革命を求める声が全植民地にひろがっていったのだ。ジョージ・ワシントンはジョージ・リード(政治家・軍人)に「『コモン・センス』というパンフレットに含まれているたくましい信条と、反論を許さない理論…」と書き、2カ月後の別の手紙で「最近私がヴァージニアから受け取った親書によると、どうやら『コモン・センス』は民衆の心の中に非常な変化を起こし始めているようだ」と述べた。また、ベンジャミン・フランクリンは『コモン・センス』の名をあげて、「私はこのパンフレットのおかげで確信がもてるようになった」と語り、ウィリアム・ヘンリー・ドレイトン(独立運動指導者)は「この宣言文は大陸会議の面々を落雷の様に見舞った」と報告している。さらに、後の歴史家、サー・ジョージ・トレヴェリアン(1838~1928)は「およそ人間の手になったもので、こんなにもあっという間に広められ、しかもその効果が長続きしているような著作をあげてみよといわれても、とうてい不可能だ。……当時の新聞によれば、『コモン・センス』は、それまで独立など思いも及ばなかった幾千もの人々を改心させ、独立へと目を向けさせたのだった。『コモン・センス』の作用で生じた奇跡には事欠かず、保守派も独立主義者になってしまったのだ」とその『アメリカ革命史』の中で述べている。<sup>30)</sup>

英国政府からの独立をめざす運動は、そのようにして、各植民地からその上部機構たる大陸会議へと向って盛り上っていった……『コモン・センス』が出てから半年にもならぬ1776年7月4日、フィラデルフィアで大陸会議が開催され、アメリカ合衆国の独立が宣言されたのだ。<sup>31)</sup>この〈下からの盛り上り〉に注目すべきであろう。

トマス・ペインは独立宣言の起草はしなかったが、それが起草される頃はジェファソンと親しかったし、ペインが盛り込むよう主張した奴隷制度反対の一条こそ省略されたが、彼の説いた諸原則はその中に織り込まれた。独立宣言が採択されるや、ペインは兵役につくが、革命軍総司令官ワシントンによって、宣伝の才能を認められ、『危機』(*The Crisis*)という表題のパンフレットを書く仕事を与えられる。その第1号冒頭で次の如く叫んだ。

現在こそ人々の魂が試されている時なのだ。青年兵士諸君や陽気な愛国者諸君も、この危機のさなかにおいては、つい祖国のために尽そうとする気持がくじけることがあるだろう。だが〈今〉それに耐える者こそ、すべての男女から愛情と感謝を受ける

に値する者なのだ。<sup>32)</sup>

この『危機』というパンフレットは、軍隊の内外を問わずほとんどすべての人に読まれ、負け戦のどたん場に追いつめられていた革命軍の士気を保つのに極めて大きな力となった、といわれる。

1783年に革命が終わり、4年後にペインは、ヨーロッパに渡り、15年間滞在する。その間、エドモンド・バーク（英国の政治家）のフランス革命非難に反駁して、古典的名著といわれる『人間の権利』(*Rights of Man*)を著わし、その後英国を去ってフランスに飛び、『理性の時代』(*Age of Reason*)を世に出す。<sup>33)</sup>

1802年に、アメリカに帰ってみると、彼は、『理性の時代』および一連の急進的な政治論文の著者であるという理由で、多くの者たちから冷遇され、信じがたいほどのしられ、無視される。だが、そうした中であって、アンドルー・ジャクソン（西部フロンティア育ちの野人で、後に第7代大統領）は、さすがに、次のように言っている。「トマス・ペインのためには記念碑を建てるまでもない。彼自身が1つの記念碑となって、自由を愛するすべての人々の魂の中に、生き続けていくのだ」と。<sup>34)</sup>

以上の如くして、アメリカは、独立革命に成功し、デモクラシーを形成していった。そうしてジェファソニアン・デモクラシー形成後、マディソニアン・デモクラシー（リパブリカニズム）を経て、アメリカはいよいよ、ジャクソニアン・デモクラシーの時代へと発展してゆくことになる。その間、アメリカ経済もまた、自由な独立自営農民層の両極分解の過程から、資本家と労働者を生み、近代資本制生産様式を形成してゆく。そうした時代の文学的表現として、「アメリカ・ルネッサンス」文学が、開花してゆくのである。——これらに関しては、次回に述べることにする。

#### 注

- 1) Perry Miller and Thomas H. Johnson (eds.), *The Puritans*, Vol. I, 1963, pp. 1~100. William T. Davis (ed.), *Bradford's History of Plymouth Plantation, 1606—1646*, 1923.
- 2) C. A. Beard, M. R. Beard and W. Beard, *The Beards' New Basic History of the United States*, 1960, Appendix 2. William Macdonald (ed.), *Documentary Source Book of American History, 1606—1926*, 1926, 1968, p. 19.
- 3) Miller and Johnson (eds.), *op. cit.*, pp. 101~103. Roger Burlingame, *The American Conscience*, 1957, p. 27.
- 4) Miller and Johnson (eds.), *op. cit.*, pp. 100~101. Perry Miller (ed.), *The American Puritans*, 1956, p. 17.
- 5) Miller and Johnson (eds.), *op. cit.*, pp. 11~12.
- 6) William T. Davis (ed.), *op. cit.*, p. 55.
- 7) Perry Miller (ed.), *op. cit.*, pp. 82~83.
- 8) Charles E. Merriam, *A History of American Political Theories*, 1926, pp. 23~26.

- 9) James Truslow Adams, *The Founding of New England*, 1921.
- 10) V. L. Parrington, *Main Currents in American Thought: Vol. I. The Colonial Mind*, 1927.
- 11) Samuel Eliot Morison, *The Builders of the Bay Colony*, 1921.
- 12) Perry Miller (ed.), *op. cit.*, p. ix.
- 13) Perry Miller, *Orthodoxy in Massachusetts, 1630—1650*, 1965, pp. 84~85.
- 14) Edmund S. Morgan, *Visible Saints*, 1963, p. 32.
- 15) Saul K. Padover, *The Genius of America*, 1960, p. 30.
- 16) *Ibid.*, pp. 24~30.
- 17) *Ibid.*, chap. 5.
- 18) Norman Foerster, *Image of America*, 1970, p. 36.
- 19) Saul K. Padover, *op. cit.*, pp. 80~93.
- 20) Thomas Jefferson, *Democracy*, 1939, 1969, cc. I ~ II.
- 21) Saul K. Padover, *op. cit.*, p. 56.
- 22) *Ibid.*, pp. 56~58.
- 23) William Macdonald (ed.), *op. cit.*, pp. 190~191
- 24) Louis M. Hacker (ed.), *The Shaping of the American Tradition*, 1947, 1968, p. 311.
- 25) *Ibid.*, pp. 310~311.
- 26) C. A. Beard, M. R. Beard and W. Beard, *op. cit.*, cc. 10~11.
- 27) Harry N. Scheiber, Harold G. Vatter and Harold U. Faulkner, *American Economic History*, 1924, 1976, c. 10.
- 28) Norman Foerster, *op. cit.*, p. 35
- 29) Edmund S. Morgan, *The Birth of the Republic, 1763—1789*, 1956. cc. 7~9. Norman Foerster, *op. cit.*, pp. 35~36.
- 30) Robert B. Downs, *Books that changed America*, 1970, c. 1.
- 31) C. A. Beard, M. R. Beard and W. Beard, *op. cit.*, c. 8.
- 32) Louis M. Hacker (ed.), *op. cit.*, p. 206.
- 33) Harry H. Clark (ed.), *Thomas Paine: Representative Selections*, 1944, 1961.
- 34) Robert B. Downs, *op. cit.*, c. 1.

## 参 考 文 献 (主要)

- Ralph Barton Perry, *Puritanism and Democracy* (Harper Torchbooks., 1965)  
 Herbert W. Scheider, *The Puritan Mind* (U. of Michigan Pr., 1955)  
 Samuel E. Morison (ed.), *Of Plymouth Plantation* (Modern Lib. Edition, 1967)  
 Morison, *The Intellectual Life of Colonial New England* (Cornell U.P., 1960)  
 Perry Miller. *Errand into the Wilderness* (Harvard U.P., 1956)  
 Miller, *New England Mind: The Seventeenth Century* (Beacon pb., 1961)  
 Miller, *New England Mind: From Colony to Province* (Beacon pb., 1961)  
 Miller, *Roger Williams: His Contribution to American Tradition* (Atheneum, 1962)  
 Miller, *The Life of the Mind in America* (Harcourt, 1965)  
 Edmund S. Morgan (ed.), *Puritan Political Ideas: 1558—1794* (Bobbs-Merrill, 1965)  
 Morgan, *The Puritan Dilemma: The Story of John Winthrop* (Little, Brown, 1958)  
 Morgan, *Roger Williams: The Church and the State* (Harcourt, Brace and World, 1967)  
 Morgan (ed.), *The American Revolution: Two Centuries of Interpretation* (Prentice-Hall, 1965)

- George A. Billias (ed.), *The American Revolution* (Holt, Rinehart & Winston, 1965)  
 R. W. Van Alstyne, *The Rising American Empire* (Basil Blackwell, 1960)  
 R. W. B. Lewis, *The American Adam* (Univ. of Chicago Press, 1955)  
 Wilson O. Clough, *The Necessary Earth* (Univ. of Texas Press, 1964)  
 F. J. Turner, *The Frontier in American History* (Krieger, 1976)  
 W. P. Webb, *The Great Frontier* (Univ. of Texas Press, 1975)  
 Ray A. Billington, *America's Frontier Heritage* (Holt, Rinehart & Winston, 1966)  
 Robert E. Spiller, *The Third Dimension* (Macmillan, 1965)  
 Spiller (ed.), *The American Literary Revolution* (New York Univ. Press, 1967)  
 Spiller, *The Cycle of American Literature* (Macmillan, 1972)  
 志賀 勝『アメリカ文学の成長』(研究社, 1969)  
 福田陸太郎(編)『アメリカ文学思潮史』(中教出版, 1975)  
 大下尙一(編)『ピューリタニズムとアメリカ』(南雲堂, 1969)  
 今津 晃『アメリカ独立革命』(至誠堂, 1974)  
 『原典アメリカ史』第一巻～第三巻(岩波書店, 1950, 1976)

## A Study of the Thought Background of Early American Literature

Saburo NAMBA

### Résumé

This essay is intended to give an account of Puritanism and of the shaping of American democracy as the thought background of early American literature.

On Puritanism, the Pilgrim Fathers are described in the historical context and a few opinions by some American scholars of the characters of Massachusetts Bay Colony are mentioned. Moreover it is suggested that the main current in Puritanism may be the Pilgrims who had hard fights in founding Plymouth Colony, and Roger Williams who founded Rhode Island Colony rather than the Puritans who established the Bay Colony.

On the shaping of American democracy, the American Revolution, which was the first step of the democracy, is touched upon, with emphasis on the personality of George Washington and the important role played by Thomas Paine. And further, Thomas Jefferson and his thought are mentioned, in contrast with Alexander Hamilton and his.